ネギま転生。俺はネギを否定《特別扱い》しない！

キャンバラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギま転生。俺はネギを否定《特別扱い》しない！

【Ｎコード】
Ｎ０６４８Ｘ

【作者名】
キャンバラ

【あらすじ】
テンプレ！ネギまの世界に送られてきた少年。彼はネギと同じ村で過ごした少年に憑依することになった！何だこの死亡フラグは。全力で逃げさせてもらう！え？駄目？それなんて鬼畜！！！
原作を知ってる少年が神様？に会うことでネギまの並行世界へ、そこはもしネギに幼馴染の少年（転生者）がいたら？という世界で・・。彼はそこで何を知り何を成すのか。
テンプレ転生主人公恋愛はわからないけどチートはあります！暇つぶし程度で見ていただけると幸いです

注意書き

この小説は、ネギまにオリ主を突っ込んでみたいという作者から生まれました。
そして、ほぼ自己満足のために書くので文章力などはないです。
それでも、読んで下さる方には最上の感謝を。

原作道理には進めようと思いますが、何分知識が薄いものでおかしいんじゃね？的なことが多々あります。そして、以下の注意文の内容に嫌悪感や殺意？を抱くようであればバックスペースをお押すことを推奨いたします。

その1、本作はネギまの―ＩＦ（並行世界）です。原作とほぼ同じですが独自解釈や、ご都合主義が含まれます。

その2、主人公はネギに少々アンチ気味です。これは主人公が原作でナギ＝スプリングフィールドが英雄（大量殺人者）ということを知っているため、そこに無垢な信頼と尊敬を送るネギが歪んでると思えるからです。

その3、主人公は原作知識を持っている転生者です。そのため事件や事故に介入することがあります。

その4、主人公はネギまの世界の―同じ村（ウェールズの山奥）に住んでいる少年です。故に魔法について知識があります。

その5、テンプレおなじみ転生者特典としてのチートが含まれます。なるべく原作世界に沿える矛盾のない能力にしますがそのことでチート能力の原作と能力の詳細が異なる場合がございます。

以上のことに同意または、「大丈夫だ、問題ない。」っといっていただける人以外は読むことをお勧めしません。

最後に、この小説は自己満足&作者の妄想です。

キャンバラ

テンプレ、テンプ…レ？

１８歳

若すぎる年で俺は死んだ。

別にテンプレ道理に猫を助けたとか幼子を居眠りトラックから救ったとかではない。

なら、なぜ死んだのか

理由は病気だった。

何の理由からかはわからないが１６歳のときにガンを患ってしまった俺は、転移した場所が神経系の近くだったため下半身不随。
車椅子と手伝ってくれる人がいなければ外出ができない体になってしまった。
しかも摘出手術をしようにもガンは末期で体の至る所に転移していたため助かる見込みは無くもって1年だと医者にも言われていた。
それでも何とかしようと仕事をしながら、親族や会社の同僚の伝まで頼み込んでくれた父と母は感謝しても仕切れない。
一時期は父や母に何故だ！と、理不尽に当り散らしていたが理由など両親にあるはずもなく。
すまない…。と、両親に泣きながら謝られた事もあった。
半年もすれば落ち着き現状どうにもすることができないと病院の先生に言われた俺は、家のベットに寄り掛かりながら毎日を過ごしていた。

その中で、暇をつぶせるものはないかと親が買ってくれたＰＣや漫画を読んでいく内に、俺はインターネットの二次小説にはまっていった。
そこでは主人公が漫画の世界に入り好き勝手行動していた。
憧れた。
自由に駆けずり回る主人公たちを。
自由に生きるその命を。
たとえそれが妄想であったとしても下半身不随で動けない俺にとっては憧れてしまうのはしょうがなかった。

そして、小説や漫画などを親にお願いし買ってもらい。それを読みながら二次小説を読み楽しんでいた。

自分は不幸だと思うが、まだ幸福な分類に入るとインターネットで見た紛争地域のニュースで知った。
親に愛され、今を生きることができる俺はとても幸福だった。

最後の瞬間、俺は自分で動くことができないほど体が弱っていたが、文字道理最後の力を振り絞って喋るのに邪魔な機械をどかし伝えた。
感謝を。

それは産んでくれた事でもあり

それは愛していてくれたことでもあり

それは理不尽な怒りをぶつけても受け止めてくれたことでもあり
それはこれまで助けてくれたことでもあった
ありがとう、自分は幸せだった…と。

そして、痛みから解放されどこかに流れていくような感覚とともに
それは聞こえた。

――――起きなさい――――

そして、意識の覚醒。

目の前にいるのはまさに神だった。

テンプレ、テンプ…レ？（後書き）

重い！！ｗｗｗ

本来ならば軽く行くはずだったんですが…なぜかすげー重い話にｗ

まぁ、とりあえず神様？に出会いいました。

さてさて、これからどう進んでいくのやら作者にもあまり分かりませぬ…

ここまで読んでくださった方に最上の感謝を。

神だ、まごうことなきネ申だ（前書き）

今回は軽いはず！ハズ…。

神だ、まごうことなきネ申だ

神様って本当にいるらしい。

だってさ、目の前に神様がいるもので…。

容姿はＴＨＡ神様って感じの長い髪に体に巻いたタオルのような服、そしてなぜか持っているクラッカー。

クラッカー？

「さてさてさて、少年よ。理解したかね？」

目の前の神様が話しかけてきた。

神様の威圧感？後光？みたいなもので瞬間的に生物としての本能が神様だと告げる。

…クラッカーがあってもだ。

「理解はしてるだろう？話を進めるとだ。」

パ――――――――――ン

手に持っていたクラッカーを鳴らし神様はこう言った。

「おめでとう！君には第２の人生を上げよう！」

理解はできますが、神様あなただれですか？というかここはどこですか

疑問は沸いたが取り乱すことはなかった…いやできなかった。
取り乱すということ自体がなぜかできなかった。目の前の存在が神だと理解したように自分の疑問が率直に口から音となり告げていた。

「聞いての通り、君には第二の人生を送ってもらう。
普通の人間は死んだ後にその世界で忘れ去られるまでしか魂が存在できないはずなんだ。
だけど君は魂がこの世界で存在してる、これはとてもおかしい事なんだ。
なぜか知らないけど君は死後どれだけ経っても魂が消えることがなかった。
ここは君が生きていた世界とは時間の流れが違う。
だから、時間が違うこの世界でははじめから消える存在はここに長い間居ることができない。
…と言うか、即座に消えるはずなんだ。
なのに君はこの世界に魂のみだとしても存在することができている。
このままじゃ、ひとつ分の魂がこの世界に居続けることになってしまう。それはひとつの魂を無駄にしてしまうことと同じだ、だからそれを防ぐために君には第二の人生を送ってもらいたいんだ。」

なるほど、そう呟いて、俺は考える。

まぁ、考えても分からないがとりあえず、第二の人生が送れることはわかった。

悪いことではないだろう。

「君は、そうだね。
テンプレ的に魔法先生ネギま！の平行世界に転生でもしてもらおうか。」

なぜネギま？しかも二次元とか…。二次小説にありがちなテンプレなど――は！？まさかこれは所謂チート主人公転生フラグか！
それでいいんですよね？神様

「あぁ。もちろんだ！君には好きな能力を上げよう！」

なんという豪快な…あなたが神か！

などとあほらしい考えをしつつ考える。
折角のチートになれる機会だしかも、行く場所が生前読み二次小説などでも散々読み進めたネギまとは…。

「ちなみに、能力はそうだな……5つぶんだけ君にあげよう。
初期設定としては主人公の幼馴染の一人としてその世界にってもらうことになるな。
そして、魔力は主人公と同じくらい。気の量も魔力と同じくらいで才能も主人公ほどではないけどもあるようにしよう。」

ものすっごい高待遇ですね。そこにまだチートもいいんですか・・・。

世界の異分子とかで、原作の修正力で消されませんか？

「そこは大丈夫だ。あくまで、原作の平行世界だから、そこで何をやろうとも消されるなんてことはないな」

おぉー。でも、平行世界ってことは原作とほとんど違う場合もありますよね？流石に主人公がＴＳとかはいやですよ？

「そこも問題は無い。なぜなら、もし君がネギの幼馴染としていたら。というＩＦの異世界だからな。
原作とは君が原作に大幅にかかわらない限り変わることはない。
例えるならば…そうだな、ネギの幼少期に殺してしまうだとかかな。
ネギにかかわる時点で多少なりとも原作と違う点も出てくるが大きなイベントは君が介入する以外変わることはないね」

そうですか…良かった。

それじゃあ、能力についての質問いいですか？

「バッチコイ。モーマンタイ。大丈夫だ、問題ない。」

何だこのノリは…まぁいいか。

まず、絶対に駄目な能力は？

「その世界にそぐわない能力だ。幸いにも不老不死などが存在する世界だ。規制はあまりきつくないが…死んだ人間などを生き帰す。神を殺す能力は与えることは出来ないな。

もちろん、私に対してのみその能力が無効化されることが前提であり絶対条件ならば、例え神を殺す能力でもあたえることはできる。」

そうですか・・。なら俺が望む能力は――――――

神だ、まごうことなきネ申だ（後書き）

誤字脱字が有ると思います。その場合感想などで教えていただけると幸いです。

そして、主人公の力はチートです。　ぼくのかんがえたさいきょうのちから　って感じですがそこらへんはチート転生の醍醐味ってことで！

ここまで読み進めてくれたあなたに最上の感謝を。

幼馴染に転生いや、憑依か？

神様から5つの能力をもらい転生した。

実際にもらったのはまだ半分だったが、赤ん坊の体では処理しきれない可能性もあったので半分になった。

流石に赤ちゃんプレイは遠慮したいので自分の記憶を抜いてもい、この世界に産み落としてもらった。

記憶が戻るのはいつになるか分からないと言われたが、ある程度自己が確立（思い出し作業）したあとに記憶が戻り能力が入るスペースができたらそのときに残りの半分が付与されるらしい。

（実際に赤ちゃんプレイは絶対に精神が壊れる！たとえ前世で介護されていたとしても、真正面から見られることはなかったし）

そして、目を開けるとそこには…

真っ暗で何も見えませんでした。

なんとか、周りに何かがあることが分かり、触った感覚で石像だってことが分かった。

・・・・・・・・ん？

石像？

周りは石像そして俺は目が覚めたとき立っていた？

つまり俺は石化してい…た？

これは…最初の死亡フラグを無事回避できたと言えばいいのだろうか？

とりあえず、ここは確かメルディアナ魔法学校の地下室だろう、確か原作ではそこに石像を安置してあっだろうし。

とりあえず、外に出ようか。

今が原作のいつかも知らなければいけないし、このままじゃ地下室で餓死してしまう。

体を石像の間や股下などをくぐらせ出口へと向かう。埃塗れになりながらもなんとか出口に向かいながらこれまでのことや自分の名前を整理することにしよう。

まず俺の名前だ。俺の名前は転生するにしたがって前の世界に居た時の名前とは別になってしまうと神様に言われたので特典の一つ目を使って神様に名前をつけてもらった。

なぜ5つしかない特典を名前に使ったかと言えば、それは昔から名は体を表すという。

意味は人や物の名は、そのものの実体を言い表している…だ。

穏やかな人になって欲しい。

健康に育って欲しい。

これらの願いをこめるからだ。

そして俺は神様に治癒や完治などの意味を込めた名前をつけて欲しいと願った。

理由として一番に思うことは、死亡フラグメーカーの主人公についていくんだ自分だって幾度と無くしにかける事があるだろう。ならばいっそのこと、自分が回復魔法も魔法使いになればいいじゃないかと考えたんだ！

そして、神様につけてもらえると言うことは名前一つでも相当に意味がある言葉になると言うことだ。

まず、人の願いで名づけた時でさえ言葉道理に穏やかになったり健康に育ったりするのだ、神様など絶対の存在に名前をつけてもらえるなど正に、言葉道理に自分が健康に育ったり回復魔法が上手くなったり呪い等が効きづらくなるだろう。実際に石化も俺の意識が戻った瞬間に解けたのだろうしね。

というわけで、俺の名前はメデオル・E（エンティケトー）・スプリングフィールド

はい、スプリングフィールドですよ。

スプリングフィールドと苗字はついているけども、俺はナギのいとこの子供に当たります。つまりはとこ、又従兄弟といわれるやつだ。

父親がスプリングフィールド、つまりナギ＝スプリングフィールドの従兄弟にあたりそして嫁さんをもらってきたのでスプリングフィールドの姓を名乗っていることになる。

ちなみに母は、何処かの民族の姫巫女に当たる人物だったそうな。しかもその民族、相当な回復の術と大規模な魔力から周囲の民族から絶大な信頼を寄せられていたが、ＭＭの出戦命令を受けたがそれを拒否しだことで周りの民族諸共反乱分子として殲滅させられ、何とか逃げた姫巫女様を助けたのが当時傭兵だった俺の父だったらしい。

なんと言う逆玉。しかも父親もこれまたスプリングフィールドに恥じない魔力量の持ち主だったそうで戦場では名前を伏せていたものの、傭兵としてはそれなりに有名だったらしい。

その後、助けてくれた父に母がつり橋効果でもあったのか一目惚れし、父もまさかＭＭがこれまでひどいことをしているとは思っていなかったらしく、最低限の正義がＭＭにはないと考えヘラス帝国に参戦その名前の高名さも相まって、前線に幾度と無く出ることになったらしいが。そこには勿論のこと母もついていったらしく、敵味方わけ隔てなく回復し転移魔法で戦地から遠ざける荒業を何千人と繰り返してきたうちに、聖母だとか、戦場の還し手とか…。それを守るようについていた父にも姫騎士やら最後の盾やら黒歴史ができそうなものがついた。

当の本人たちはそんなことは気にすることは無くマイペースにいたらしいが…。

赤き翼ほどではないが、大戦の尽力者とも言われてたとか。

まぁ、そんもせいでＭＭから逃げ伸びた一族だとばれてしまい大戦後は姿を隠し、実家でラブラブ（死語）と過ごしていた。

そして、ネギの生まれる５年前に俺は生まれ今に至るわけだけども。

なんであれだけ強かった父と母が居ないのかがきになる。しかも母の力量ならたとえ伯爵級の悪魔の魔法でさえ片手間で解除できるだろうに…。

どうにも、悪魔襲撃事件のときに俺は意識が無かったらしくそこの記憶は無かったから仕方ない。

とりあえず、やっと壁にたどり着いた。

これで壁沿いに歩いていけばドアに当たるはずそうすれば外に出られ――――――――

急に目の前が開き光が差し込んできた。

そこにいた人は…

まぶしくてみれません。

幼馴染に転生いや、憑依か？（後書き）

名前について。独自設定含みます

Ｅ　　コズモエンテレケイアより完全なるの部分がエンテレケイアだと思うので、そこからとって少しもじってエンティケトー。一応母の姓でもある。真ん中に入れるのはミドルネームだ？そんなこと知りません。

無理を通せば道理が引っｍ（ｒｙ　まぁ、あぁ？！と思った方は最終兵器独自解釈と言うことでご勘弁を

ｍｅｄｅｏｒ　ラテン語で治るという意味らしいですが詳しくは分かりません。

しかもあってるかも分かりませんがｗｗ

読み方なんかまるっきりそれっぽく読んだだけですしねｗ

主人公は前世で難病に苦しみました。

そこから回復魔法やそっち方向に目が向くことが多いと言うわけです

基本的にこの名前はチートです

名前自体に治ると、完全という概念とが含まれてる（ハズ）なので

この名前で精霊を使役して回復すると致命傷を受けた死に体でもほぼ全回復します

という独自設定。

そこに居たのは…

魔法学園学長でした。

まぁーそうだよね、ここに来る人なんかネギの祖父である学園長しか居ないよね。

原作では立ち入り禁止になってたりしたらしいし。

んで、その学園長何だかすごくあせった感じでこの部屋の中を見ている。

なにかあったのだろうか？

ちなみに俺はドアの石像の影に居るので気づいていないそうですね。

とりあえず、声でもかけますか。

「すみm――――「魔法の射手（サギタ・マギカ）！」ぬぁっ！」

声をかけた瞬間飛んでくる魔法攻撃。俺がいったい何をしたというんだ！

そんなことを考えてるうちに目の前に魔法の射手（サギタ・マギカ）が当たる――――

瞬間、目の前に白く透明な壁が魔法を防ぐ。

危なかった。特典その2でこれをもらってなかったら死んでた…。

特典その2

意識的でも無意識的でも殺意や敵意また流れ弾でも、自分が当たる場合のみ無意識で殺傷能力がある、又は行動が阻まれる攻撃・捕縛魔法、気、物理攻撃を弾くという素敵バリア。
障壁と違うので障壁突破攻撃や、斬る対象を選ぶ斬魔剣二ノ太刀も防ぐことができる。
色は違うけどATフィールドとほぼ同じ。

「何者じゃ。ここは立ち入り禁止のはずじゃが？」

特典2を考察していたら先ほど攻撃してきた学園長が話しかけてきた。
どうやら、向うからはこちらは影になっていて人影しか分からないらしい。
シールドがあるにしてもまた攻撃は食らいたくない、つまり話をしないと…。

「メデオル・E（エンティケトー）・スプリングフィールドです。お爺ちゃん」

明るい所に移動しながらの自己紹介。
移動中に攻撃される可能性もあったが、それよりも名前を語る賊だと思われ攻撃されることよりはましだと思う。
記憶では両親の親に当たる人物はすでに他界していたのでこの学園長をお爺ちゃんと呼んでいたらしい。

「メデオルじゃと？」

学園長は目を見開き驚いていた。
まぁ、そうだろう。
実際爵位級の悪魔の石化から解除されたのだ驚かないはずがない。

「…本物か？」

「本物だよ？お爺ちゃん。なんだか知らないけど起きたらここに居たんだ。ここってどこ？」

あくまで子供っぽく話しかけると、お爺ちゃんも近寄ってくれて抱きしめてくれた。

「良かった。本当に良かったわい・・・。」

少し震えながら話すお爺ちゃんに俺も、記憶の中の俺がやっていたように抱きつく。

抱きついていたら、安心したのか急激に眠気に襲われ、そのまま睡魔に誘われるがごとくまぶたを閉じる。どうやら子供の俺には石像から這い出して動くことは結構な重労働だったらい。

俺はお爺ちゃんに抱きつきながら眠りに落ちていった…。

ｓｉｄ学園長

あの悪魔襲撃事件の後始末もひと段落付、石造とされた村人も学園の地下に無事集められた。

あの村にはどこで聞いたか知らんが、高度な回復術者がいるという噂が流れておって、それを聞いた患者が最後の望みで助けを求めにくることが多かった。その村には、かの有名な『戦場の還し手』が住んでおったから、病気や怪我などは完璧に治すからのう。

そこで治して貰った者がそのまま住むこともあったそうじゃ。
じゃから、村人の人数も意外と多く、安全な収容場所もなかったなので唯一広いスペースを取ることが出来る学園の地下にあつめたのじゃ。
石化魔法は高度な術式と、こちらの魔法使いとまた違う悪魔の術式だったので世界最高の術者でもとけないそうじゃ。
セレナ（メデオルの母）さえ生きておれば石化も解除できたのじゃが、悪魔襲撃で真っ先に狙われたらしく駆け付けた時にはすでに遅く息絶えておった…。
息子のメデオルはそこに居なかったのかセレナたちが逃がしたのかその場所には居なかったが、離れた場所で村人とともに石化され、石像になってるところを発見された。
忘れ形見であるメデオルだけはと思い、何とか高名な医療術氏に賭けてみたが解除できなかった。
メデオルも学園の地下に安置して、なんとか解除できる魔法使いを見つけようと誓ったがいまだ見つけられていない。
ため息を吐き、仕事と、人探しで疲れた目を休めようと目を瞑った時、それは起きた。
バキン――と、乾いた音が聞こえたような音が聞こえた気がして、愕然とした。
今日ワシが全力で障壁をと封印魔法をかけたものが解除されたのだ。
それも一瞬にして膨大な魔力とともに。

顔が一瞬で青くなった。

石像のことを知ってるのは少ないが、魔法学園に何かを安置したという噂は流れておる。

それが金目のものだと思った賊が入り込んだか！

杖を取り、転移魔法を使い地下室のドアの近くに跳んできたワシは封印が解けてるのを確認するとドアを開け放ち中に入っていった。

中には人影は見当たらなく、石像があるだけじゃった。

封印だけ解いて変えるなど考えられんし、中に隠れていると考えるのが妥当じゃな。

杖を握りなおしいつでも魔法を使えるようにする。

「すみm――「魔法の射手（サギタ・マギカ）！」ぬぁっ！」

声をかけて来た者に魔法を放つ。若い声が聞こえた当たったような声色じゃないのう。

わしの封印を解くことやこの膨大な魔力から相当な術者じゃろう。

警戒しながら相手の目的を知るために声をかける。

「何者じゃ。ここは立ち入り禁止のはずじゃが？」

「メデオル・E（エンティケトー）・スプリングフィールドです。お爺ちゃん」

「メデオルじゃと？…本物か？」

ワシにわしの孫の名を語るとは！と怒ったが陰から出てきた顔を見て一瞬思考が停止した。
なぜかそこには石化したはずのメデオルがいたのじゃから…。

「本物だよ？お爺ちゃん。なんだか知らないけど起きたらここに居たんだ。ここってどこ？」

間違いないほんものじゃ…！
ワシは近寄ってメデオルを包み込んで抱きしめた。

「良かった。本当に良かったわい・・・。」

本当に良かった。
心の隅では一生石化されたままかになってしまうかのとおもっておった。
じゃから、本当に良かった。

メデオルに抱きついておるとメデオルは寝ておった。
安心したんじゃろう…そう思うとわしはメデオルを抱え魔法を使って家に帰った。
職務のことなどまったく頭になかったし、このときはメデオルを寝かせてやろうとしか思うことは出来なかったしのう。

次の日、机の上には書類や、資料の山が出来ておった。

そこに居たのは…（後書き）

とりあえず、母親の名前登場。ワーワーパチパチ

そして、これ以降母親はともかく父親はあんまし出てこない（筈）です。

そして、特典その2これはぶっちゃけATフィールド白いｖｅｒです。

異論は認める（キリッ

とりあえず、チートっぽく無敵装甲はつけてみたかったｗｗｗ

こんな感じであと3つでてきます。

ちなみに、大戦で生き残った仮にも英雄がこんなに簡単にやられたのはわけがあります。

まぁ、フラグですね。

あとで回収しますんでｗ

あと、ATフィールドモドキのことを詳しく。

無意識的に発動するので一方向展開というが、攻撃に対して展開する形なので攻撃全てにATフィールドモドキが発動されます。

原作の完全なる世界の曼陀羅障壁ATフィールドＶｅｒと考えて欲しいでやんすｗ

あんなに多重には展開しませんがね。だって一枚で全て防げるしwww

一年生になったならー友達１００人できるかなぁー♪

「おはようございます。」

「うむ、おはよう。メデオル」

朝の日差しで目が覚めた俺は、ベットから降り服を着替えダイニングに行く。
そこにはお爺(学園長)ちゃんがいて挨拶。

「朝食はそこに用意してあるから食べなさい。そのあとは、学校にいくとしようかの。」

「はーぃ。お爺ちゃん。」

俺はあの石化解除事件のあと、お爺ちゃんに石化とお爺ちゃんの封印を解くほどの魔力を制御するためにおじいちゃんに直接魔力制御を教えてもらっている。
お爺ちゃんが言うには自然に漏れている量だけでも魔力量だけなら、数倍から数十倍はあるらしい。

ネギと同じくらいの魔力量でも多すぎて制御できないからあれだけ、頻繁に暴発しているのに、この魔力量だったら暴発確実。もし暴発したらまさに災害を巻き起こす。
人間災害なんてマジで洒落にならん。

しかも、これで全魔力なら良い物を…なんと！自然に漏れているだけであって全体の魔力量はその数十倍らしい。

例えるならばみんな大好き飛騨の大鬼神リョウメンスクナノカミを呼び出したとしたら、全盛期の力で尚且つこちらの言うことを聞かせたままで戦略殲滅魔法をバカスカ打ち放てるという魔力量。

なぜにこーなったんだ？

神がいった基本スペックはネギと同じくらいだとおもったんだが。神に確認する手立てはないし、それに特典はそれが分かるものは一つだけあるが、魔力が安定してないから使えそうにない。それに、神と会話したところの記憶がどうしてもあいまいだ。特典のことは覚えているがあとは、クラッカーを鳴らされたこと神様ルックだったことしかほとんど思い出せない。

これまでの特典には不備がなかったから大丈夫だと思うが…、少々不安ではある。

一番可能性があるとすれば生まれた後、後天的に増えたと考えるのが妥当か。

それはおいて置いて、なぜ俺が学校に通っていないかと言うと　この膨大な魔力を制御するためである。
自分の魔力故に外からの制御はあまり効き難く、一応指輪などで制御しているがやはり中から制御したほうが良いようだ。

原作では、魔法学園は魔力制御をあまり教えていないように見えていたが、やはり魔法学園は魔法と言う秘匿技術をそれなりに制御できるようになるために通うらしい。いくら魔力の少ない人間だろうとも何も知らずにいれば、魔法使いの本能的に危機が迫ったりする

と、魔力を暴発してしまう傾向にあるらしく、それを一般人が見たときに一々記憶操作などをしていたら、この情報化社会ではどうしても処理し切れなかった一般人から漏れる可能性がある。

それを防ぐための魔法学園らしい。

そのような理由から、魔法学園で学ぶことは殺傷能力の高い攻撃魔法を教えることではなく、日常で使っても実際に見てもごまかせるような物をつかい魔力を慣れさせ、暴発と自分の身を守れる最低限の障壁と攻撃魔法（サギタ・マギカ）を教えるとのことだ。

故にネギが魔法学園を卒業できたと言う理由はＭＭからせっつかれたのもあるだろうが、英雄という色眼鏡で見られていたから早く卒業できたからに他ならない。

本当ならば、自分の魔力を個人差はあるものの、一般人と過ごしていてもなんら問題なく秘匿できるようにすることが魔法学園で学ぶべきことらしい。

何が言いたいかと言えば、

制御できないなら危険＆秘匿が…

←

制御できるようにするため魔法学園に

←

制御できるようにならないと学校から卒業できない

←

膨大な魔力から学校でも制御できるか不安

←

魔法使いの村から出ることができない

←

原作に関われない。

という、結論になり、おじいちゃんに伝えて制御を教えてもらってから入学させてもらうことになった。

ナギ＝スプリングフィールドがいたという学校だからそれなりに競争率は高いがお爺ちゃん（職権乱用）ぱわーで難なく入ることができた。

このお爺ちゃんなんか、ネギにべた甘だったのは孫がかわいくて仕方なかったらしいから、俺が一緒にいるだけでニッコニッコしまくりである。

正直あきれたが…いいんだけどね？

利用しまくってやるぜ！と、までは行かないが俺の記憶がなかった部分でもだいぶ懐いていたのでそれに感化されたか、今でもあまりこのおじいちゃんには俺も結構懐いてしまっている。

とりあえず、がんばって修行して魔力を抑えようか、ＭＭなんかに利用されたくないしね！

制御する修行をすること１１ヶ月。やっと、人並みの魔力量に抑えることが出来た。

あのあと、簡単な制御魔法から魔力封印の術式まで。親に教えてもらっていた記憶とあわせて苦労はしたが魔力は余り漏れることもなく、今なら一般人として過ごせるはず！

だから、学校に通っても問題ないだろうと思いおじいちゃんに頼んでみた。

頼んだ次の日には入学準備や杖教科書まで全てそろっていた。

爺馬鹿最高？

そして、冒頭にもどる！

年齢のことや、学園長が認めているということで飛び級して3年生になったわけだが、ここでやっと原作の主人公であるネギと、その幼馴染アーニャを見つけることが出来た。

漫画とは少し違うが、記憶の中のネギやアーニャよりは少し成長している、制御で丸一年近くおじいちゃんのところで過ごしていたから　まぁ、それくらいだろう。

「ネギ、アーニャ。久しぶり！」

本を読みながら近づいてくるネギと、それを横から小さく文句を言いながらついているアーニャ。

「ぇ？…あー！メデオルお兄ちゃん！」　「メデオルー！」

ネギとアーニャが目を丸くして驚く。

まぁ、あの事件で一年間行方不明になった幼馴染がいきなり出てきたんだ驚くだろう。

「無事だったんだ！良かった。

でも、今までどこにいたの？」

「そうよ。心配したのよいきなり居なくなっちゃうんだから…」

「近くの病院でね、意識不明になっちゃってたから入院してたんだよ。

やっと、意識が回復して、リハビリも終わったからこっちの学校に入学することになったんだ。よろしくね」

爵位級の悪魔の石化を自力で解いたとすれは、人体実験などの標的にされてしまうことは確実なので、ばらさないように言われている。

尚且つ、この魔力量。今は制御が出来てるとはいえばれたら拙い。

だから極力人には伝えないようにとおじいちゃんには口もすっぱくしながら言われている。

別にばらそうとは思わないし、麻帆良につくまでは極力おとなしくしていようと思うから問題ないけどね。

魔法学校は６、７歳の小学一年生のころから基本入れるらしいが、ネギは魔法を早く学びたいが故に。
俺は親が実力者だったので直接親に教えてもらっていた記憶があるから、少し遅れた入学でも問題はない。
実際近くに学校がないところは親に教えてもらいながら小学校に通うなどもあるし。

そして、親やお爺ちゃんに教えてもらったことは前世のこともあり、だいぶ進んでいる。まだ１０歳なのに日本の大学なら卒業できるくらいに知識と頭はいい。

頭はネギスペックが基本だから、勉強をしたりしていないと落ちてしまうが幸い親は何でもやらせようとしていたし、学園長の家にはそれなりに貴重な本などがあったのでそれなりに実力はある。

まぁ、ネギも１０歳で大学卒業程度の知識もってたからね、自分が持つことができても不思議ではない。それに多分だが、親がすごいと言う環境も神が整えた可能性もある。

全力で活用させてもらいますがね。

さぁ、がんばって原作まで魔法やほかの事の知識を詰め込もうか！

一年生になったならー友達１００人できるかなぁー♪（後書き）

はい、脳みそチート

です！！ｗ

時系列とかは、余り気にしないでいただけると幸いですが。一応ネギは今５歳で入学したてと言うことになっています。

事件が４歳そして、卒業が１０歳で二回飛び級したので妥当かと。

んで、主人公が１０歳の理由？

あれだ、日本の法律で１６歳以下は働いちゃ駄目らしいからそこらへんの理不尽さでちうちゃんが爆発しないようにするためのちょっとした気遣(わるだくみ)い。

あの人はいろいろとｓｓみても理不尽に苦労しているからね、少しぐらいは…ね

まぁ、ｓｓでも苦労しそうですがｗｗｗｗ

何か不備や質問がありましたら遠慮なくどうぞ。

罵詈騒音でなければ基本対応しますし、

それでも納得が出来ない方は伝家の宝刀―これはへいこうせかいのはなしです《ご都合主義万歳》で納得させます！

次はとりあえず、キンクリですかね。

魔法学園の話なんてあんまり原作でもなかったし、なるべく早く原作に入りたいしね。

ヒロインは一応決まってますが、ｓｓの醍醐味人を出して欲しいなどは極力努力しますのでどんどん言ってください。

魔法学園卒業！卒業試験は…。

あれから、5年経った。

魔法学園の授業は少々物足りなかったが問題なく進み、ネギを原作道理にするためにテストでは極力ネギを超えないように手加減をした。

ネギが飛び級できたのはその頭の良さと、常に学園一位にいたからだ。

こんなところで原作崩壊をしても仕方ないからね。

それに、おじいちゃんにちょっとお願いをして難しい参考書や、アリアドネーで書かれた魔法についての論文などを取り寄せてもらうこともあって有意義な5年間だった。

そして、今日は卒業式の日。

ネギは最優秀生徒なので、一番最後に表彰&卒業証書をもらう。

そして、俺も準優秀者なので最後のほうだ。

ネギは卒業できる…と言うか立派な魔法使い（マギステ・ルマギ）になる修行が楽しみなのか、そわそわと落ち着きがない。その横でネギをチラチラと横目で見ているアーニャも周りから見たら、気になる男の子をチラチラとみているような感じになっていてとても、微笑ましい。

「次、メデオル・E（エンティケトー）・スプリングフィールド」

「はい」

しっかりとした声で返事をしながら卒業証書をおじいちゃんから受け取る。

小さな声で「ようがんばったの…」といわれた、うれしいが少し恥ずかしい。

軽くおじいちゃんに微笑んでから生徒がいる場所に戻る。

「最後に、ネギ＝スプリングフィールド！」

「は、ハイ！」

ネギが前に出ると少々周りがざわめく。

基本周りがいってるのは英雄の息子（ナギのむすこ）についてだ。

ネギを見ているやつなんてほとんどいない。

少々怒気がもれたのか、おじいちゃんのほうから苦笑するような顔を向けられた。

おじいちゃんは、俺がネギを英雄の息子として見られるのを良しとしないことはほぼ毎日愚痴っていたのでしっている。

とりあえず、それはおいて置くとしよう。

「この7年間よくがんばってきた。だが、これからが修行の本番だ。気を抜くでないぞ？

これにて、授与式を閉式する。」

ようやく終わった。長いこと静止していた体を伸ばし、ネギとアーニャのほうに向かう。

ネギとアーニャは廊下のほうに歩き、そこで待っていたネカネ＝スプリングフィールドに気づくと卒業証書を自慢げに見せていた。カエネも微笑ましそうにネギの頭をなでる。

いくら、大人の頭脳を持っていたとしてもまだ年齢は子供だ、こういうときにしか出ないネギの子供っぽさをみるのがうれしいのだろう。

「修行の地はどこだったの？」

「ネギ、なんて書いてあった？　私はロンドンで占い師をやることらしいわ。」

「俺も聞きたいな。ネギどこで修行することになっんだ？」

「お兄ちゃん！」　「メデオルさん」　「メデオル」

三者三様の呼ばれ方をする。ネギ、アーニャ、ネカネの順番で…だ。

「えと、今浮かび上がるところ。お…。」

そこに書かれていたのは予想道理、「日本で先生をやること」。

え――――――！！！？？？

廊下に3人の声が高々に響いた。

そして、俺は…。

「麻帆良学園で魔法教師をやること。」

だった。

…これは、おじいちゃんの仕業だろう、実際俺はまだＭＭに目をつけられるようなことはやっていない。石化解除がばれたなら問題だったかがそれは知っている人が少ないから問題はほとんどない。それに、麻帆良と、限定されているところからみてもネギをＭＭに利用することを防ぐようにすることがこの目的だろう。

どうにかして、修行は日本でやろうと思っていたところだから好都合だ、むしろとても良い。
麻帆良という限定された空間内で魔法の認識阻害による修行場所。それに、原作介入することが出来る。これ以上の高条件はないだろう。

考え事をしているうちに三人はおじいちゃんに抗議をしに行ったようだ。

ハイ！と、大きな声でネギが返事をする所を聞いたのでおおむね原作道理にいったのだろう。

俺はおじいちゃんと話すために近くにいく。

「お爺ちゃん。少し話があります。」

「ふむ。ワシも少し話さなければならんことがあるしのう、付いてきなさい。」

短く了解の返事をした後におじいちゃんの後をついていく。後ろではカエネさんが倒れていて、それを支えるアーニャとネギ、ネギなんかに教師なんて無理よ！　無理じゃないよ！　の押収が繰り広げられていた。

苦笑しながら前を歩いてるおじいちゃんにおいつく。

この5年間おじいちゃんにはいろいろなところで迷惑をかけて来た。最初の魔力制御然り、アリアドネーの論文然り。そして、最後の工作も。

その度にお礼などは言っていたが、やはり、もう一度しっかりとお礼をしておいたほうがいいだろう。

校長室のドアを開けお爺ちゃんと一緒に中に入る。

おじいちゃんが応客椅子に腰掛け自分もその向かい側に座る。

「メデオル、まずは卒業おめでとう。これからも大変だとは思うが修行もがんばりなさい。」

「ありがとう、お爺ちゃん。それに、真帆良のことも。アレおじいちゃんの仕業でしょう？」

「そうじゃのう。メデオルには自由に修行をして欲しかったんじゃがな。ＭＭは英雄の息子（ナギのむすこ）を手っ取り早く、英雄に仕立て上げて自分たちの駒にしたいらしくての。なんとか、真帆良に頼んだはいいが、あそこはＭＭにも手が出しやすい。じゃから、メデオルに魔法使いとして、ネギを補佐して欲しいのじゃ。」

いつも、ニコニコしているおじいちゃんが真剣な顔つきで俺の前にいるのは珍しい、それほどに切羽詰った状況なのであろう。

「断る理由がないよ、おじいちゃん。お爺ちゃんには良くして貰って来たし、それにネギを勝手にＭＭの駒になんかさせないよ。たとえ英雄の息子だとしても、親は親、子供は子供なんだ。世代を超えて英雄にする必要はない。」

そうか…。そうおじいちゃんは安心した顔で言うと、ローブから手紙みたいなものを取り出した。

「これはの、メデオルの父と母が残した手紙じゃ。悪魔襲撃のときの記憶が今でも思い出せないと言っていたじゃろう？そのことについてもこの手紙に書いてあるそうじゃ。」

そういいながら、手紙をコチラに寄越す。

手紙を手に取り裏に反してもなんら変哲もない、魔法世界でよく使われる音声画像つきの手紙だ。

手紙を開き再生ボタンを押す。

『この手紙を読んでいると言うことは私はもう死んでいるという事でしょう。こんな手紙しか残せなかった母親でごめんなさいね。

今私達の村は悪魔に襲われているわ、ほとんどの悪魔は私とあの人で倒したけど私は悪魔の呪いを受けたみたいでもう長くはないわ。

だから、親としてこ少しあなたに残すわ。これから話すことは私達の一族に代々伝えられて来たことよ。
私達の一族は、代々子供が魔力を認識始めたころから自分達で魔法を教えてきたの。だから、この一族のみに伝えられる魔法があるの。秘匿されてきた技術だからこそ余り外にばれなかったけれども、MMが見つけてしまい一族は滅んだわ。
私は一族の姫巫女としての立場から逃がされ、あなたの父親に助けてもらったわ。彼はとてもハンサムでね！かっこよかったんだよー！！
…コホン、話を戻すわ。それで、私達に受け継がれてきた魔法だけど、主な魔法は２つ術式を見る瞳と、決別の継承と言われるものよ。

一つ目は魔力を目に流すと術式が起動しその目で魔法の術式を見ることができることよ。
見ることができる術式はほぼ全て。遅延魔法や、無詠唱でもそのときに構成される魔力を術式で見ることができるわ、例え幻術でも見ることができるから魔法使いにはとっても危険なものよ。それだけ強いから対価も大きいけどね。
対価は一度起動すればほぼ半永久的に起動できるけど、起動条件は親の記憶における感情そして、決別の継承を受けている事、この２つよ。

２つ目の術式は決別の継承と言って、親の魔力のほとんどを娘や息子に与えること。これの対価は親が魔法を使えなくなることと、１０歳までにこの魔法を使用することよ。

これを今寝ているあなたに使用したわ。本当は使いたくはなかったけど、私ももう長くは生きられないから、せめて何かを残しておきたかった。
経験者としてこの手紙を読んでも、なんとも思わないだろうけど私

達はあなたを愛していた。それだけは覚えておいてね。
それじゃ、さよなら。元気にそだってね…メデオル』

それだけで、手紙は終わっていた。

部屋に沈黙が訪れる。

「メデオル。大丈夫か？」

おじいちゃんが心配して声をかけてくれる。

「大丈夫だよ、この手紙を読んでもここに書いてあった通りに、親としての感情はないよ。
でも…。」

俺の顔からは涙が流れていた。

「悲しくはないんだ、…でも、でもどうしても涙が出てとまらない…。」

おじいちゃんは隣の椅子に座り直し頭をなでてくれた。

「あやつらは、死にかけてまでも息子に何かを残そうとしてくれたのじゃ。
例え魔法でそのことを忘れさせようとも親のとの繋がりはそんな事では切れんよ。」

「うん。そうだね、俺はあの両親を持ったことを誇りに思うよ。」

そういうとおじいちゃんは優しく微笑み頭をなでてくれた。

涙も止まり落ち着いた俺は、改めておじいちゃんにお礼をいった。

「ありがとうお爺ちゃん。これまで育ててくれて。本当に感謝している。」

「気にする出ない、ワシも孫達と過せ楽しかったしのう。」

いつもの用に笑いながら返してくれるおじいちゃんに自然と笑みがこぼれる。

この人に育ててもらって本当に良かった。

そう、心から思えた。

魔法学園卒業！卒業試験は…。　（後書き）

　これで魔法学園編？は終了ですね。
どっちかって言うと魔法学園編じゃなくて、幼少期編ですかね。
魔法使いの手紙は原作３巻でネカネがネギに送っていたのと同じものです
そして、本文で出てきた２つの術式ですが。
これはチートではありますが特典ではありません。
最初に出てきた人物がここに生まれるようにしただけです。
とりあえず、分からないことなどがありましたら感想版にでも書いておいてください。返信は必ずいたします。
誤字脱字報告もできればよろしくおねがいいたします

麻帆良に行くための準備期間。

お礼を言った後、お爺ちゃんは両親の家が入っている魔法球を俺にくれた。
お爺ちゃん曰く、俺に向けて書かれていた手紙とは別に手書きでお爺ちゃん向けの遺言？みたいなものが書かれていたらしい。
その遺言だと、私の家丸ごと小型の魔法球に入れてメデオルが魔法学園を卒業したときに手紙と一緒に渡しなさい。と書かれていたんだとか。
有名な人たちだったから技術が書かれていたりする魔法書を全てメデオルに残すための処置で、放っておかれたら、ＭＭにどこからか嗅ぎ付かれて盗まれたり貴重な文献だから回収するなど言われたらメデオルに残せないと思ったらしい。
実際に学者みたいな人が来てギャーギャー騒いでいたらしいが焼けてしまったと、ダミーの家を見せてごまかしたらしい。
ついでに、あの膨大な魔力の制御の仕方も家にあるらしく、それをみながらおじいちゃんは俺に教えていたんだとか。
そして、この魔法球は特殊らしく貴重な石碑の文献や遺跡の一部などを永遠保存するための奴を元に作られた精神のみ魔法球に入れる中で時間が止まったままの魔法球らしい。
精神のみだから体が寝ているような形になるが、中の時間が止まっているから中でどれだけ時間が経とうとも出てきたら一瞬という優れもの。

お値段は普通の魔法球の最高級品のじつに１０倍。それこそ、世界の博物館にでも行かないと見れないものだと。

それを両親は自分達で作ったらしい。

俺のぉー両親の力はぁ世界一ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！

あれだ、紅き翼涙目！

マジでチートだな…。

と、親の残してくれた財産とともに俺はアメリカに旅立つことに。

ん？何で日本じゃないかだって？そんなの、日本じゃ飛び級制度がないからだよ。

俺は１６なったばっかだから日本じゃ一応働けるけど教員にはなれない。麻帆良なら問題はないと思うが、働くのだ給料をもらう以上はしっかりと教えなければならない。

と言うことで大学のおじいちゃんの知り合いの教授（魔法使い）にお願いして入学試験を受けさせてもらう。もちろんネギの頭脳と同じくらい頭の良い俺はまったく問題もなく入学。

そして、その日のうちに飛び級試験を受け一気に４年に。後は必須事項である教育実習で高校生相手に授業を半年間、麻帆良にいくまでやるだけ。

麻帆良では教育実習生として、通うことになるとおもうから今のうちに教科書を読んで教えるところを暗記しておきますかね。

そんなことをしながら過ごしていくうちに、結構大雑把な友人もできて、小さな教授と呼ばれるようになってしまった。（非魔法使い）

一応身長は１７５はあるんだけどなぁ…。

ｓｉｄ魔法使い教授

私は、旧世界で学問を教えている教授だ。もともと魔法使いとして過ごしていたが、惚れた女の人が一般人だったので魔法で食べて行こうとは思わず、もともと教員免許は持っていたので大学で教えていくうちに教授となった。

今ではこちら側の生活は十分楽しく過ごせているし、家内も魔法のことは知らないが十分穏やかに過ごせている。

稀に魔法使いの友人や知り合いが来ることもあるが昔の知り合いで納得してくれるし、その説明だけでいやな顔をせずに納得してくれる家内に私は感謝しても仕切れない。

今日も、昔お世話になった先生から頼まれ魔法使いを一人、大学へ推薦しだが…あの子供は天才だった。嫌、天才と言う言葉すら生ぬるいと感じてしまうほどだった。もちろん絶えず努力をしているっことはこの年になれば、分かっては来るが…。

大学の、それも入学試験としてレベルを図るための試験でオール１００点を取った。

私でさえ、自分の得意な科目ではそれこそ１００点など造作もなく取れるが、ほかの分野だとそれなりに難しくなってくる。

だが、この子は全てを満点で、それこそ入学して意味があるのかと思ったぐらいだ。

次の日に合格したと、告げれば飛び級試験を受けさせてくれとのたまった。
オール満点を取れたのだから断る理由も見つからず、４年生への飛び級試験をうけた。結果は当たり前のようにオール満点、大学で学ぶべきことなど、小指の薄皮ほども無いだろうこの子は何を学びにきたのかと聞けば、学校の課題ででた、先生になること。と言う課題をこなすために、大学を卒業しなければならないのだそうだ。

もう、乾いた笑い声しか出なかった。

案の定、半年もかからずに教員免許を取った彼は日本へと旅経っていった。

彼の名前はメデオル・Ｅ・スプリングフィールド。

モンスターだ。

麻帆良に行くための準備期間。（後書き）

実際ネギが１０歳で大学を卒業して教員免許を取ってしまったら、こんな感じになってしまうんではないかなと思い、それを、メデオルにやらせてみました。

今回は短いですが、麻帆良と魔法学園のつなぎとして考えてもらえれば…。

本文ででてきた魔法球。しっかり捏造です。一応魔法なんだし時間を凝縮するものがあるのならとめてしまえるのもあるのではないかなと思いつくってしまいました。

そして、その魔法球の中身は家ですが回復魔法や気についての論文などそれこそ究極技法とばれた咸卦法から、闇の福音の闇の技法までしっかりと残された本があります。
これは彼らの一族が集め理解してきた文献で、彼らの一族に伝わる術式を見る瞳で理解したのを残してあるからです、ほとんどはＭＭの襲撃時に紛失や焼失してしまったがメデオルの母親が持ち出した本の入った魔法球にはいていたと言う設定です。

それを勉強して理解したメデオルは咸卦法から闇の技法まで使えます。
ぶっちゃけ。闇の技法は自分の闇の部分を理解することですし、咸卦法も自分の陰と陽を理解して、使うものですし、その術式に使用するものはは魔力と気という外の生命力と体内の生命力とどちらも根本的に使うものは一緒なので使うことは出来ます。
ですが、ネギよりも明るく楽天的な性格の本作の主人公ではアレだ

けの出力は闇の技法ではでません。あれは闇を理解しその大きさで魔法を飲み込んで使う技法ですからね。

そして、咸卦法もつかえますが居合い拳は使えないので、身体能力激化！ぐらいですかね。
擬似的な居合い拳は出来ますが（咸卦のエネルギーをうちだす、ぶっちゃけ、気功砲もどき）そこまで威力はありません。あの威力は居合い拳だからこそ出せると思うので。

しかし、究極技法ですから、たかが魔力強化、気で強化したぐらいの魔法使いや剣士ではフルボッコにすることが出来ます。
原作では魔力と気で密度をあげることで身体能力もその分上がっていましたので、主人公の膨大な魔力と気（外部の生命エネルギー＝魔力。それを体内に抑えている＝エネルギーを体内で循環させている＝気の増加）ですからやろうとおもえば、アラレちゃんの地球割りも出来ます！

チートですよ！

麻帆良学園に着きましたとさ。

アメリカで過ごした半年は授業経験もできたが、前世で出来なかった学校に通うことが出来てついうっかり色々とやってしまったが楽しく過ごせた。

流石に同じ年はいなかったけれどもそんなことは関係なく話してくれる人も多くこちらも気楽に話すことが出来た。流石にお酒を飲まされそうになったときは困ったけれど…。

そして、やっと原作のメインである真帆良についたのはいいのだが…。

今現在、魔法使いさん達に追いかけられてます。

「とまりなさい、侵入者！」

この方しつこい、非常にしつこい。確かに麻帆良に来て少し浮かれていたことも否めないが、だからって少し魔力があるからって行き成り襲い掛かってくるのはいけないと思います。

ちょっと、麻帆良のエヴァとネギが戦った場所で風景を眺めていただけなのに魔法の射手（サギタ・マギカ）を行き成り撃ち放ってくるこの人の感性とか、魔法の秘匿義務についてとか凄く問い質してみたい。

そんな攻撃をされれば基本逃げるわけで、逃げた方向が真帆良内だったのがいけないのかドバドバと魔法打たれています。

「魔法の射手（サギタ・マギカ）・連弾・光の１７矢！」

げ、またか。

動くことで木を盾にして3発防ぐ、連鎖爆発した爆風で加速し瞬動で距離を開ける。

残りの7発を気と魔力障壁で防ぐ。魔力障壁は使い勝手はいいが余り多くを防いでしまうと動けなくなってしまうし視界も悪くなってしまう。

「風よ！」

簡単な風を起こす魔法を使い魔法障壁とぶつかったときにできた煙を少し拡散させ、相手から見えないところに瞬動を使い林の中に逃げ込みそのまま走る。

出来ればこのままビジネスホテルがある市街地などに逃げ込みたい。

一般人の多い場所では認識阻害があるからと言って流石に魔法は使ってこないだろう。

明るい方に向かって走り出す。身体能力は同年代に比べてもいいだから魔力強化をすると魔力の反応で居場所がばれてしまうから使わない。同じ年の子供とならあっちが魔力で少し強化していようともこっちのほうが早く走れる自信はある。

林をぬけ、明るいところに出るとそこには3人の魔法先生とタカミチさんがいた。

方向転換して逃げようするが、瞬動の入りよりも速く豪殺居合い拳を放たれ魔力障壁で防ぐが、足を止められてしまう。拙いと、瞬動ですぐに離脱しようとするが…見えない壁に阻まれ、壁に軽く衝突して止まる。

特典その3アンサートーカーと、瞳で見て結界と判断。攻撃を受けるまでの時間でこの結界を破壊できるかという問いに否(できない)と理解し、このままではまずいのでそこからもう一度瞬動で逃げる。逃げた瞬間　今いた場所に魔法の矢が飛んでくるが当たらないので無視。

軽く距離をとり、お互いが警戒しいったん攻撃がとまる。こっちはタカミチを知っているが、向こうは俺を知っているかは分からない。ネギと話すことはあってもタカミチと直接会って話した事は無いからだ。

「行き成りひどいですよ。タカミチさん」

話して誤解を解こうと頭にかぶっている帽子を脱ごうとするが、それは敵対行動と取ったらしく――――――

「ココには色々と貴重なものが多くてね。侵入者を易々と通してあげるわけにはいかないんだよ。」

喋りながら豪殺居合い拳を打ち放ってくるタカミチを、魔力を少し込めた障壁で防ぐ。（主人公の魔力は先祖の魔力を受け継いでいるのでとてつもなく多く少し込めるだけである程度の魔法は防ぐことが出来る。）

しかし、そのとんでもない威力の豪殺居合い拳が何度もぶち当たり障壁ごと斜めに抑えられ身動きが取れなくなる。そこに魔法使い先生の捕縛用魔法（攻撃魔法でないことを祈る）が来る――――――

――が。

なんかもうめんどくさくなってきたので、障壁を消しＡＭＦ（アンチ・マギ・フィールド）（特典その２）で魔法や豪殺居合い拳を受け切る。

「―光の精霊４００人　収束・魔法の射手・戒めの光の４矢《俺に何の罪があるんだ！》」

煙で見えなくなっている所に―多目の魔力と怒りを込めた収束した戒めの射手で拘束。

油断していた４人の魔法使い先生は完全に拘束できたがタカミチは居合い拳で吹き飛ばしたらしい。

原作知識からタカミチ咸卦法は身体能力を約１０倍以上にあげられるハズだから、収束された戒めの射手を吹き飛ばすのに１５、６発当てれば防げる計算だが…やれるとは思っていなかった。

「…ふぅ。流石に僕も危なかったよ。君はいったい何者だい？」

割と真剣な顔つきでこちらを睨んでくるタカミチ。

この小康状態がいつまでも続くとは思っていないので今のうちに自己紹介をする。もし、覚えていてくれれば戦闘は止められるだろうしね。

「メデオルです。タカミチさん。メデオルス・Ｅ・プリングフィールドです。」

今までかぶっていた深めの帽子を外し自己紹介。侵入者が俺だと分かったタカミチさんは口をあんぐりと空け、タバコを落としていた。

予想外に驚いたタカミチさんを尻目にため息を吐く。とりあえず、戦闘は終わらせることが出来たかな・・。

ｓｅｉｄタカミチ・Ｔ・高畑

３学期まであと少し。３学期からはネギくんとその幼馴染のメデオルくんが真帆良に来るらしく、出張が多い僕も久しぶりに真帆良に戻って来るとが出来た。

一息つこうとネクタイを緩めると、学園長から念話届く。

『タカミチくん、帰ってきたところすまぬが侵入者の迎撃に向かって欲しい。人手が足りなくて今居る魔法先生と生徒は全て、出払ってしまってのう。…近くに居る魔法先生では少々心伴いのでのう。頼めるかの？』

『分かりました。場所は？』

ため息をつきたくなるが我慢し、場所を聞き出す。魔力で体を強化しながら外に出て跳躍。急いで侵入者が向かっているという学園前広場に向かう。

「高畑先生　こちらです！」

学園広場に着くとすでに3人の魔法先生が現場についていて、一人の魔法先生がこの場所に誘導しているらしい。誘導している先生のみが瞬動を使いながら移動できるらしく、それ以外の先生は補助系が得意な者と完全な後衛型、そして、結界術に長けた先生だった。

そして、その侵入者は実力者らしく攻撃をするも全て地形や障壁で受け流しながら逃げていると言う。

下調べはしてあるだろうが、地形などを利用して逃げていることに素直に驚き、相当な実力者だと気を引き締める。

来ます！と先生の一人が念話で入ってきた情報をほかの先生に口頭で教える。

林から飛び出してきた者に豪殺居合い拳を叩き込む。

様子見の一撃だったからか防がれ、しかし、一瞬だが足を止めることが出来た。

その間に準備をしていた結界を形成。補助が得意な先生がそれをより強化し半径１３ｍの結界が完成。

逃げようとしたのか瞬動で横に動くが結界にぶつかり止まる。好機と見た若い魔法先生が魔法の矢を撃つが軽く避けられ、こちらを警戒する用に構える。こちらも何も見逃さないように構え場が緊張する。

「行き成りひどいですよ。タカミチさん」

侵入者は若い声だった。実力者が若いことに驚いた…だが。

「ココには色々と貴重なものが多くてね。侵入者を易々と通してあげるわけにはいかないんだよ。」

手を上げようとしたのを見て、行動させる前に…と、喋りながら豪殺居合い兼を斜めに放ち抑えようとする。

ずいぶんと硬い障壁にぶち当たり、その場で硬直するがこっちは４人。唱えていた魔法を横や上から降り注ぐ。

一瞬、豪殺居合い拳の当たった感触に違和感を感じ長年の勘から、瞬動を使い後方にさがる。

それと同時に向こうから放たれる一本の光の射手。

弾こうと斜めに居合い拳を放つが軌道修正し再度こちらを狙ってくる。

普通の射手と違うことに気づいた僕はすぐ様全力で魔法の射手を下に押しつぶす。

7発程度当たったところでやっと下に当たり地面がえぐれる、しかしその他の先生には手が回らず、みな捕獲され、魔法で簀巻きにされていた。

「…ふぅ。流石に僕も危なかったよ。君はいったい何者だい？」

流石にこれはやばい

何か細工をしては在っただろうが、不意打ちだったとしても僕が8発も放たなければ消えない魔法の射手なんて最悪すぎる。増援を呼ぼうと時間稼ぎのため話しかける。

「メデオルです。タカミチさん。メデオルス・E・プリングフィールドです。」

帽子を脱ぎながら彼は自己紹介をした、その顔は先日学園長に見せていただいた資料と同じ顔で…。

今までの戦闘がまさか半年前に魔法学園を卒業したものの動きだと気づいて開いた口がふさがらなかった。

どうやら、スプリングフィールドの一族はそろいもそろってバグキャラらしい。

僕が正気に戻ったのは口から零れたタバコが脚に落ちて靴が燃えたときだった。

麻帆良学園に着きましたとさ。（後書き）

はい。タカミチの咸卦法の出力は原作と、最初に受けた威力で主人公は大体の威力はこれくらいかなと、計算しその結果が１５，６発、実力不足や戦闘経験の少なさ、タカミチの技の威力の読み違いや受け流した方法、初手だったので様子見の威力だったこともあり大幅にずれましたが。

実際に見たことがい威力ではしょうがないと思います。それに半年の間実戦経験など出来るはずも無く

そして、出てきた特典３アンサートーカー劣化版

なぜ劣化版かというと、全て分かってしまったら面白くない。ということで、魔法に対してのみ質問をすることで答えが分かる。

そして、特典４超高速思考

出てはきませんでしたが戦闘時間は２分あるかないかです。そして、結界のときなんか３秒と時間はほとんどありません。

ネギは持ち前の思考速度から、出来ますが同じスペックだとしても主人公性格によって出来ることとできないことができてしまうのでそれのなかの自分がこれは出来ないとやばいと考えもらったのが高速思考。

主人公は死にたくありませんので基本保護系チートが多いです。まぁ、仕方ないですよね。

あと、裏話的にはあんな高速戦闘中に考えられないのだったらネギに闇の技法で雷の魔法でも取り込まれたら確実に負けてしまう、それはチートとして許せねぇということで、高速思考

主人公が出来ないと考えているだけであって、戦闘経験などをつめばそれこそネギよりも早い速度で思考できるようになる。チートだから仕方ない

感想なんかもらえるとキャンバラはとてもうれしいのですと、キャンバラは期待した目であなたを見つめます。

コッチミンナなんて言わないでぇーw

学園長先生。見た目はタダの妖怪

タカミチさんの靴が燃えてやっと解凍されたタカミチさん。

後ろからさっきまで鬼ごっこをしていた魔法使いが到着して、簀巻きにしていた魔法使いの先生と一緒に俺の話をしているようだ。

どうやら、ネギが来ることは聞いてたらしいが俺が来ることは英雄の息子が来ることに対してさほど重要ではないらしくここに居る先生方は忘れていたようだ。

流石、英雄の息子。注目度が半端では無い。

これでは流石に俺一人で厄介ごと全てをネギから遠ざけるのは難しそうだ。

説明が終わったのかほかの先生方は四散して、タカミチさんだけがこちらに向かってきた。

「すまないね　メデオル君。どうやらこちらで手違いがあったようでね、君が来ることを知らなかった人が居てね。」

「大丈夫ですよ、被害はほとんどありませんし。こちらについたのが結構遅かったので今日は真帆良内のホテルなどで休んで明日向かおうとしたのですが…。襲われてしまって。」

「…本当にすまない。」

タカミチさんが苦笑いしながら謝ってきた。

「学園長が今会いたいそうだけど、大丈夫かい？」

夜遅くになったから心配して言ってくれているのだろうが、この位の年なら一日位寝なくても翌日に問題はない。アメリカでも休みの日は一日中遊びまわされていたこともあるしね。

「大丈夫です。でも、学園長にこんな夜遅くに行っても大丈夫でしょうか？」

「それこそ問題ないよ。今日は学園長室にまだいるからね。」

襲撃でもあって学園長が叩き起こされた、そんな感じだろう。

よろしくお願いします、とタカミチさんに言い、学園長室に連れて行ってもらう。

距離は結構あるらしく少し走ることになったが常日頃から体力は鍛えようとしているから、十分ついていくことが出来た。今なら魔力強化なしでフルマラソンできるような気がする！

学園長室は中等部のところにあると、説明してくれたが…。

それが女子中等部ということは伝えられなかった。イメージ的なものでもあるのだろうが、そんなところに作る学園長はとてつもなく爺馬鹿か女子中学生を見ていたいというエロ爺のどちらかだろう。

たぶん、近衛木乃香を護るゆえの配置だとは思うが…。
そんなことを考えつつ、学園長室前に。
「学園長、僕です。」
ノックをして入るタカミチさん。
その後ろに追従する形で入る。
「ふぉっふぉ。よく来たのう、メデオル君。」
「……。は、はじめましてメデオル・E・スプリングフィールドです。学園長先生」
少しは覚悟していたが、本当に後頭部が長い。まさか人間？にこんな人が居るなんて思わなかった。
「メデオル君。学園長の後頭部には触れないであげて欲しい。」
小声でそういってくるタカミチさん。
それは学園長室に入る前に伝えておくことだと思います。
「とりあえず、メデオル君には正規採用前の実習試験として２－Ａの副担任と、数学教師になってもらうことになる。それとは別に、夜中の真帆良学園内の警備のローテーションにも入ってもらいたい。」

「はい。私の課題は真帆良で魔法教師として、過ごすことですから。問題はありません。」

「ふぉっふぉ。そんなに硬くならんでも大丈夫じゃよ。とりあえず、今はまだ冬休みじゃ。今のうちに学園内を見ておくといいじゃろう。

明日、案内する人物をそちらに向かわせよう。」

「ありがとうございます。ところで、私はどこに住めばいいでしょうか？

まだこっちに着いて間もないのですむところが決まってなくて…。」

「ふむ、なら職員寮が空いているはずじゃからそこに、入ってもらうことにしよう。

案内はタカミチ君にお願いしようかの？」

「わかりました。」

「それでは、明日関係者に君を麻帆良に案内するように伝えよう。何時くらいが良いかね？」

「…。ではお昼ころにお願いできますか？」

「そう伝えておこう。では、タカミチ君案内を。」

「ハイ。」

「失礼します。」

頭を下げて学園長室から出るそして、一緒に出てきたタカミチさんにきいた。

「あの、後頭部って整形デモしたんですか？」

いくら高速思考が出来ようとも、理解できないことは考えられないのだなーと思い知った。

結構真剣な顔で聞く俺にタカミチは寮に案内する間まともに喋ることができなかった。

笑いすぎて。

学園長先生。見た目はタダの妖怪（後書き）

結構長い頭の学園長。はじめてみたらこの反応が適当だと思います。

学園長室に入ってから地の文は思考が回りすぎて逆に考えられなかったからですね。

タカミチ大分崩壊してきました。

ぶっちゃけ、若いんですから笑ったほうがいいと思います。

タカミチは強いですがこのｓｓではギャグ要因になってしまう可能性が出てきました！

だって、ほかのｓｓでもなにかとダンディーなんですもの笑わせて見たって良くはありませんこと？

麻帆良学園散策。

タカミチさんに連れて行ってもらって着いた先生の寮は下手なアパートよりも良い部屋だった。

先生用の浴場もあるらしいのでそっちもとても楽しみだ。
ネギと違って俺は別に風呂は嫌いじゃない。前世では途中からろくに一人で風呂に入れなかったからな。
一人では入れるのはゆったり出来るから良い！

休みなどに温泉などをめぐってみるのもいいかもしれない。

話がずれたが…流石麻帆良。漫画では生徒もアレだけいい部屋に住んでいたから期待していたが。
まさに予想以上。とてもうれしい誤算だ。

部屋を一回りした後に倉庫となる部屋を決めた後にそこで影の倉庫から荷物を取り出す。

俺は影属性に適性が余りなかったので動いてしまったり外部干渉を受けてしまうと戦闘中は使うことは出来ない。それに入る量も少ない。

魔法学園で先生にねだって教えてもらったのはいいが使えなくて半日近く落ち込んだのはちょっとした思い出(黒歴史)だ余りにも落ち込んでいたのが目に余ったのかネギも勉強の手を休めて慰めてくれた。

流石にネギにまで心配されるのはやばいと、その後すぐに立ち直っ

たが。ただで起き上がらないのがスプリングフィールド。

大きいものを入れられないならたくさん入る小さいものを入れればいいじゃないか！。

と、結論に達し。この瞳とアンサートーカー（劣化版）で内容量と外見が合わない内部拡大の術を作成した。

この有効性は意外と知られており、術式は違うが基本高値で売られていて、魔法世界ではトレジャーハンターや賞金稼ぎ。はたまた賞金首まで使っていると言う。

やはりこのことを知ったときは愕然と思想になったが、値段を聞いて自分が手を出せないと知るとどうせ変えなかったんだ問題は無いんだ！と無理やり納得させた。

取り出したのはリュックサックと、旅行かばん最後に長方形の黒い箱。

リュックサックから取り出したのは衣服や食器。アメリカで過ごしていたので金策として売った、規定の量と同じくらい入る小さな袋の代金で買ったものだ。あまり必要が無かったのでそこまで売らなかったが普通より安価だったので簡単に売れた。そのおかげで魔法薬や自分用の武器を作る金には困らなかったのだが…。まほネットで少々有名になってしまったのが痛かった。

リュックサックの中身を全て棚や箪笥に仕舞、旅行かばんを開ける。

その中には親の形見の魔法球。傍から見るとボトルシップならぬボトルハウスなので装飾品として、飾ってある。

これは頑丈でしかも、許可が無いものがいくら触ろうと中に入ることが出来ず。その上自分の力と同じ負荷をかけて、絶対に盗難できないようになっている。

流石歴史的文献を保存する魔法球盗難対策はばっちりだ。

魔法球の他にも向こうで買ったモデルガンや普通の本屋で見つけた魔力のこもっている本。ネットで取り寄せた日本の陰陽師についての一般的な文献（歴史小説のようなもの）日本語の再学習と思い出しに良く使っている。

ほかにも組み立てる前の本棚や小型テントなども入っている。

その中で必要なものだけを取り出し、開いたスペースに先ほどのリュックサックを畳んで仕舞い、旅行かばんを影に沈める。

そして、最後に長方形の黒い箱。

魔力を込めながら留め金を外し、箱を広げる。

その中には自分で作った術式で試験的に導入してみた武器や魔法具。などがとても小さく区切られ、その一個一個にしっかりと物が入っていた。

その中でも自分が長年思い続けて、アメリカでやっと完成した３つの武器と、５つの補助道具が真ん中に置かれている。

一回取り出そうと持ったが夜も遅くなってきていることを壁に備え付けられていた時計で読み取り、黒い箱を閉める。

倉庫とした部屋に侵入者撃退用のトラップを思いつく限り膨大な魔力を使い自分と自分が登録した者意外に必ず反応するようにしかけ扉を閉める。

「そろそろ、寝ようかな。明日は学園内を散策するんだ眠くて良く見てませんじゃ案内する人に失礼だからね。」

腕を伸ばしながら寝室に入り、箪笥から下着とタオル寝巻き用のジャージを持ってバスルームに。

流石に湯を張ると眠ってしまいそうだったのでまた明日は居ることにして汗をシャワーで流す。

シャワーから出て軽くミネラルウォーターを飲み、柔軟体操をする。

戦闘用に作った武器で戦うためには体が柔軟であることは有利になるので本格的に武器が作れるようになってきてからは毎日のようにやっている。

柔軟体操が終わった後、ベットに身を投げそのまま目を閉じる。目覚ましをセットしていないことを思い出し起きようとしたが、睡魔には勝てなかったのでそのまま就寝。

――――ｚｚＺ――――

翌朝、目が覚めるとそこには１１時２０分の時計。

寝る時間が寝る時間なので寝すぎたとは思わないが。案内してくれる人が来るのが昼ころだ。外に買い物に行く時間はなさそうなので、シャワーを浴び垂らしたままになっていた金髪の長い髪の毛を後ろで軽く編み、垂らす。

柔軟運動をして、外に出れるような格好になったときにインターホーンがなった。

「ナイスタイミング」

小さく呟きながらドアを開ける。

そこには色黒の背が高い女性が。ジーパンにシャツ、その上に羽織った上着と、ラフな格好ではあるが似合っている。

「はじめまして、メデオル先生。学園長に学内の案内を頼まれた者です。」

「あ、こちらこそ。今日はよろしくお願いしますね。 」

原作にこんな方いたかな？と片隅に思いながら話す。

「知っているとは思いますが、メデオル・Ｅ・スプリングフィールドです。…先生のお名前を伺っても？」

なんとなく、貫禄っぽいのが出ていたからそう敬称すると、彼女はピシッと石化したような感じになった。

にっこりと、笑み、頭に手を置かれる。

そして彼女も自己紹介をした。

「麻帆良　中　等　部　２　の　Ａ　の龍宮真名です、メデオル先生。私は１４歳です。そして先生では在りません。」

頭に載せられた手によるアイアンクローで攻撃され…いたたたたたぁああ。

「す、すみません。ドアを開けたらかっこいい美人の方がいたので少々戸惑ってしまいました。」

「そうですか。私はまだ中学生ですからね？」

にっこりと、軽く左目も光っていた気がしたが無視。

「イエスッサー！」

原作キャラもリアルで見ると少々違うところがあり。龍宮真名さんの場合服装も相まって結構大人の女性に見えてしまった。

「…フッ。冗談だよメデオル先生。案内する場所は先生の希望にあわせるように言われているからどこか生きたいところはありますか？」

「いえ、すみませんでした。…あと、まだ先生ではないので先生は付けないでもいいですよ。
私も１６ですから年も余りかわらないので。

お昼をまだだったので近くの美味しい料理屋ってありますか？

その後は服とか、デパートの場所などをおしえてください。」

「わかったよ、メデオルさん。

とりあえず、近くに美味しいところがあるんだそこに案内しよう。」

「ありがとうございます。

あ、そうだ、龍宮さんもお昼一緒にどうですか？
案内料ってわけじゃありませんがおごりますよ。」

「そうか、なら私も奢ってもらう事にしよう。」

最初はやばかったが何とか乗り越え？て昼飯をとることに。

龍宮さんのお勧めなだけあって味も美味しくデザートの餡蜜もとても美味しかった。

その後にデパートの場所や世界樹の周辺の広場、小物やアクセサリーの類が売ってある場所。
隠れた名店など、細かく教えてくれた。

途中で魔法使いの関係者だとそちらから振ってくれたので、副担任になるクラスの情報と関係者について教えてもらった。

原作との相違点は今のところ無く、３１全員が居た（相坂さよは見えないから３０だけど）

そこで、エヴァンジェリンと、その従者の茶々丸についても教えてもらった。

代金として餡蜜や団子などもおごらされたが。

そんなこんなで時間は流れ、夕方になり、ある程度の案内は終わった。

と、言っても先生の寮の周辺だけであり、麻帆良全体で見ると１０％も見て回れなかったがとても楽しかった。

「今日はありがとうございました。龍宮さん

「こちらこそ、餡蜜も食べれたし楽しかったよ。」

「では、今度会うときは学校でですかね？そのときはよろしくお願いしますね。」

「あぁ、こちらこそ、と言いたいが。

五日後に世界樹前広場で魔法先生と魔法生徒の集会がある。そこでメデオルさんの顔見せと力試しもやるそうだ。

メデオルさんの実力も楽しみにさせてもらうよ」

「そうですか。期待に沿えるようにがんばりますね。

今日はありがとうございました」

軽く微笑んでから女子寮に向かって歩くすがたは、やはり大人の女性とさほど変わらなく、年齢詐欺ｄ――――――急に寒気がしたので考えるのはやめておこう。

今日は近くにある、店で買った出来合いのお弁当と野菜ジュースをのんでから、柔軟をと、軽く基礎鍛錬を魔法球の中で行いゆっくりと湯船につかり。寝ることにした。

知らぬが仏の話。

ある麻帆良のパパラッチが2りで出歩く姿を見て新学期早々の新聞に龍宮まさかの恋人か！と、言う新聞が翌日に女子寮に張り出され、龍宮のところに押しかける２－Ａが大勢いたとか居ないないとか。

メデオルは女子寮に行くはずもなく、アンティークショップや図書館塔で有意義な5日間を過ごしていた。

5日後の夜の集会では、龍宮がメデオルを軽くにらんでいる姿と、なぜ睨まれているのか分からないメデオル。

そして案内を頼んで一人のクラスメイトとの関係を険悪にしてしまったと頭を抱える学園長の姿があった。

そんなお話。

麻帆良学園散策。（後書き）

龍宮かわぇー

身長１８４とかたけぇー

年齢１４とか絶対に詐欺してｒ（バギュ――――ン

今回は何か長い話になりました。

龍宮を出したのはちょっとしたフラグです。

明日の更新で回収するので出来ればまた見てやってください。

ヒントは　アメリカ　龍宮

半分以上の人が解けると思うなぁーｗｗ

魔法は技術だ。（前書き）

今回ちょっとしたアンチを含むかもしれません。

やっとまともな戦闘だ。

魔法は技術だ。

今日は龍宮さんのいっていた顔見せの日。

実力の確認などをするらしいから今出来る装備をフル装備してきた。

両手の中指と小指に指輪を。

ベルトに付いているパックには術式を書いた紙を入れてある。

そして、左右の腰にある武器を。

今回は近接戦闘が多いから小型のものを付けた。

そして、上から装備を隠すためのマントを纏い、準備完了。

広場に向かうとしようか。

広場に着いた。

魔力で足場を作り上空から観察してみる。

まだ夜遅くないからか生徒も結構居る。

それに結構な人数の先生らしき人達そして、シスターや龍宮さんその隣には野太刀をもった人が居る。

多分あの人が桜咲刹那だろう。

タカミチさんに学園長。

そして、茶々丸さんが少し離れたところに居る。

どうやらエヴァンジェリン（エターナルロリータ）は居ないようだ。

茶々丸さんが居るからいいけど。

足場を使い、瞬動と重力で学園町の近くに降りる。

落下後に何人かの先生は気づいたのか、行き成り怪しい人物が現れたことに少しざわめく。（学園長とタカミチそれに、龍宮さんは上空に居るときには気づかれていた。）

「ふぉふぉ。派手な登場の仕方じゃのう。…それでは、主役もそろったところじゃそろそろ始めようかの。

タカミチ君先生等を。」

「わかりました。先生方並びに生徒の諸君、何人かの人たちは知っているかもしれないが今日集まってもらったのは明日から夜の見回りに参加してもらう先生を紹介しようと思う。」

タカミチさんが一歩引いて俺を前でにだす。

フードを外していないことに気づき、外してから自己紹介。

「三学期から魔法学園の卒業課題として、麻帆良で魔法先生をやることになりました。

メデオル・E・スプリングフィールドです。
拙いところもあると思いますが、精一杯やって行きたいと思います。
」

最後に一礼して、タカミチや学園長先生のところに戻る。

軽く拍手があり、ひと段落。

「メデオル君は、魔法学園を卒業してから大学を半年で卒業するほど優秀な先生じゃ。

教師としても期待できるじゃろう。

麻帆良の夜の見回りではまだ若いと言うことから生徒と同じ時間帯での見回りが多くなるじゃろう。

もし、一緒の班になったのなら生徒の諸君は学校の授業で分からないことなどを聞いてみるのも良かろう。」

まじっすかーやら、おぉーと、色々と反応が伺える。初印象は悪くないようだ。

「それでは、メデオル君の歓迎と戦い方を見るに当たって模擬戦をしてみたいと思う。

メデオル君誰か戦ってみたいてみたい先生はいるかね？」

こちらに選ばせてくれるのか。…なら。

「タカミチ先生と戦ってみたいです。」

これによって起きた反応は三つ。

一つは暖かな笑い声、タカミチを良く知っている先生達。
ＡＡＡとして、有名なタカミチと戦ってみたいと言う気持ちだろうと思う先生方。

２つ目は反応なし。実力に見合った先生を選んだことによる落胆も少々ありそうだ。この人だちは比較的実戦経験が豊富な人たち（だと思われる）。桜咲さんもここだ。

３つ目は――――――「ふざけるな、最近来たばかりなのに調子に乗ってるんじゃない！」

「そうだ！英雄を軽々しく相手に選ぶなんて　恥を知れ！」

――――――――と言う。英雄主義の若い先生。若干名の生徒もココに含まれる。

実力は余り無いが、魔法を使えるから上等だとか考えてる正義馬鹿。
いや、正義馬鹿ではなく魔法こそが正義と考えてる思考停止馬鹿。

魔法は技術だろうに…。

ボソッと呟いた言葉は学園長がさっきまで使っていた声を拡張する魔法にのってほとんど全ての人に聞こえてしまった。

まずった。

タカミチは苦笑い。咎める様子はない。学園長は笑っている。内心は分からないがそこまで今の発言を問題視しては無いようだ。

その1とその2の方たちの反応8：2。

反応しても何もしない人と反応してからも笑みを浮かべてる人たち。

その3は大激怒！。

ふざけるなーやら世間も知らない餓鬼がーやら魔法使いは崇高なものである！やら、ずいぶんと頭のおかしい奴ら。

ここには先日、タカミチと戦ったときにいた魔法の射手を使ってきた先生も含まれていた。

がやがやと騒ぎが納まらないな中、学園長が魔力を流しながら言った一言で大分静かになる。

気当たり。魔力でやるから魔力当たりか　語呂悪いね。

「静かにしないか！各々言いたいことはあるじゃろうが、それはこの後に個人的にしてもらおうかのう。

今はメデオル君の実力を見てみることが重要じゃろうて。

タカミチくんなら怪我をさせる心配もない。実力を見てみるのには最適じゃろう。」

確かに実力差が均等の場合双方が傷つくが片方の実力が飛びぬけて高い場合。それは遊びになるだろう。

だけど、俺はあの正義を語る魔法使いどもが許せない。

魔法学園でもネギを通して英雄を見ているような奴らが居たが、極力おじいちゃんと俺で抑えてきた。

ここでも同じ場合、抑止力となる存在が必要だ。例えそれがここに居る大勢に嫌われてしまう事だとしても。

あの危ういネギをこいつらに蹂躙させたくはない。

「学園長。やはり模擬戦はあの方達とやらせてください。
向こうは何人居てもかまいません。」

いまだに継続されていた魔法で相手に届くころには短気な奴らは魔法を詠唱し始めていた。

そして、何人かはこちらに向かって各々の武器を構え向かってくる。

タカミチがとめようとするが俺が前に出て学園長が下がることで、タカミチもとまる。

俺は、少しだけ魔力制御を緩め。戦いの歌を使い準備をする。

――――――――さぁ、戦闘の始まりだ。

まず何人か中の良い先生が俺を囲む。その後ろでは後衛の人たちが魔法を放ってきた。

俺は魔法を使い煙幕を張ると、瞬動を使って上空に。

上空から敵の位置と、大体の敵対している人以外が離れていることをみて、敵対している人数を正確に把握。

マントを圧縮ケースＶｅｒポーチに突っ込み。腰についている武器を両手で掴み、引抜く。

それは、もともとの形からは想像できないほど改造された、デザートイーグル。

近接戦闘も出来るようにされたデザートイーグルはストライクガンのように銃先を押さえられても撃てるようになっている。
その上トリガーガードの前には銃と同じ厚さの四角い物がつけられていて、その底にも銃口のようなものが数個開いている。

反動と威力が高く、改造によって重くなりすぎて子供には向かない銃だが。魔力供給でそれを可能にする。

煙幕を風で吹き飛ばしそこに誰も居ないことに気づいた近接の魔法使い共に狙いを定め撃つ。

ドドドドドン。

正面の銃口から放たれた弾は吸い込まれるように頭に当たり上空からヘッドショットされる。
撃たれたものたちは弾が当たったところから流れる光の帯によって拘束され蓑虫のようになりながら倒れる。

虚空瞬動を使い真ん中に飛び降りた俺は、突然倒れる仲間と現れた俺

敵に困惑しうろたえる。

その敵を容赦なく打ち抜く。

アメリカで銃による近接戦闘を教えている軍人崩れの人物を、俺はよくつるんで遊びに行く射撃場の友人の一人から紹介された。

その人は軍人ではなく、若いころは魔法世界で銃を使った魔法使いだった。秘匿義務から魔法ではなく軍人だったとして、余生を過ごしている彼は銃による近接攻撃ガン＝カタを教えていた。

魔法使いでは異例として有名だったその人を俺は師事し、ガン＝カタを学び半年間でほぼ全てのことを吸収した。

魔法使いにとって苦手な距離である近接。だからこそ、近接の前衛が必要なのだが。

俺はこの膨大な魔力をガン＝カタを用いた近接戦闘で活かすことで、前衛が居なくても強力な術を使い敵を倒すことが出来るガン＝カタに一目惚れをしてしまいこれに決めた。

右、左、前、後。

さまざまな角度から来る敵を銃による魔法によって拘束し、殲滅していく。

遠距離の魔法も瞳とアンサートーカーで読み取り効果範囲から離れながら攻撃することでで止まることなく敵を撃つ。

刀で切りかかってきた敵を片方の銃で受け止め魔力弾でその獲物を折る。反対側の銃で腹に弾をぶち込み、そこから拘束帯がのびで倒れる。

杖で攻撃してくる敵をいなし、こぶしで攻撃してくる敵を打ち抜き止まることなくそして

倒れる瞬間まで敵を意識し、次の敵を両手にもった銃で近距離遠距離に関わらず迎撃。

時間にして3分で、麻帆良の魔法至上主義は光る蓑虫となって床に倒れていた。

「――終了っ！」

ホルダーに銃を突っ込みそう言い放った俺に回りは。

ほぼ全ての人物が驚き、驚愕していた。

たった一人の人物に魔法使い３０人全てを行動不能にした事実に…。

それを行ったのが魔法を習い終えて半年の少年だということに。

魔法は技術だ。（後書き）

戦闘終了？タカミチさんは次回にでも。

もしかしたら戦闘はしないかもw

とりあえず、前回に出したフラグ回収。

とっても分かりにくかったかもしれませんが。

龍宮さんが京都で近衛このかの魔力で召還された鬼どもと戦ったときと同じ戦法です。

主人公はこのほかにも、アサルトライフルによる中距離魔法（魔砲）戦闘。

スナイパーライフルによる長距離魔法攻撃と、３種類の戦いが出来ます。

とりあえず、ガン＝カタがかっこよかったので出してしまいました。

後悔も反省もしません。

そして、英雄＆魔法至上主義を殲滅。

攻撃魔法じゃないのは主人公模擬戦だった故にです。

殺すことは余りしませんが敵対してくるときは、四肢を切断し魔法を使えなくするなど平気でやります。

イギリスやアメリカで過ごしていくうちに考え方が変わっていたせ

いということも在ります。

次回は後片付けとかですね。そろそろネギが襲撃します。

ネギは基本変わっていませんが原作よりも魔力制御が上手くなっています。

だがしかし、くしゃみによる武装解除はなぜか直りませんでした。

という設定。

感想お待ちしております。

後片付けと、説明会。

どうも、メデオルです。

今現在蓑虫になった魔法先生方のかたずけているところです。

俺が開発したこの蓑虫弾。

効果は約２０分くらい続く。

その間に魔法や気などを使ってしまうとエネルギーに変換して吸収されてしまい、それを捕獲している帯の維持に使われてしまうという対魔法使い、魔術使い専用の捕獲弾。

普通捕まれば逃げようとするから、魔法使いが逃げる手段として魔法を使うのはごく当たり前のこと。

そのことを裏目にとってみた。

ちなみに、物理攻撃もほとんど魔力というか、帯によって無効化されてしまいます。

当たれば２０分は確実に蓑虫状態、魔法を使えそれ以上になってしまうという…。

ぶっちゃけ、作ってみた当初はこれ使えるのかと思ったが…捕縛には最高だね。

このほかにも蓑虫Ｖｅｒ２があって、それは帯が体に触れていれば魔力や気を生命活動に問題ないくらい残して吸い取ってしまうと言

うもの。
それ以外は1とそんなに変わらないが物理攻撃に少々弱くなってしまっている。
まるで、戦場の死骸を丸めて置いておくような感じになってしまったが仕方ない
模擬戦ですカラ！
そして、蓑虫からだんだんと出てこれた人たちはまるで虫の孵化のようでほとんどの皆さんが顔をゆがめていました。
2時間ぐらいして、ようやく最後の一人が蓑虫から出てきた
それを確認した学園長がその人に何度目かになる説明をして帰らせる
あと残っているのは、タカミチさん　学園長　龍宮さん　その隣に桜咲さん、そして、茶々丸。
なぜ集まっているかと言うと、戦い方は分かったが、その性能がぶっ飛び過ぎて分からないから説明を頼むとのこと。
龍宮さんがいるのはガン＝カタについて聞きたいのだろう。桜咲さんはその付き添いみたいな感じかな。

茶々丸さんは……何で居るんでしょうか？
学園長もとめないし、帰らせる様子もない。
ならば一緒に説明してもいいという判断なのだろう。
それか、エヴァンジェリンと敵対したとき対応できるように聞いておこうと言うのだろうか？
それだったらなんて主人思いの従者だ。
欲しくなるよね！

「とりあえず、跡形付け済みませんでした。
まさかここまで効果があるとは思っていませんでした。」

「ココまで？っていう事は使ったのは初めてだったのかい？」
「いえ、一度使ったことあったのですがそのときは２０分位で切れてしまったので…。
まさか2時間も解除にかかるとは思っていませんでした。」
軽く笑うがタカミチさん以下ほかの人の笑みはちょっと引きつっていた。

桜咲さんと茶々丸は無表情だったが。

「そ…それで、主に戦い方は銃による近接攻撃。

つまり前衛ということで良いのかい？」

「そうですね。

主に使うのはガン＝カタによる近接射撃ですが…銃の性質上結構遠くまで狙えますし、今回はこのハンドガン（？）を使いましたがアサルトライフルを使えばもって射程は延びますし。

ガン＝カタ以外でもスナイパーライフルや、マシンガンで戦うことも出来ます。

弾は俺が作った捕獲弾を使いますがほかにも魔法の射手を連打したり、実弾も使うことが出来ます。

それに、まだ魔法の射手と、そのほか数種類しか覚えていませんが覚えることが出来たら砲台としても使えると思います。

…あ、俺のスナイパーライフルは特別製でして…高いところから狙えるなら７Ｋｍ以内なら１００％当てることが出来ます。」

「それは、凄い。どれ位銃を扱っていたのか？」

龍宮さんが驚いて聞いてくる。

同じく銃使いとして、聞いておきたいのだろう。

だが俺は少し違う。

「あぁ、俺はまだ半年しか銃は使ったこと無いけど…未来予報の魔法を銃にロックした相手をある程度追尾する魔法を弾に組み込んでいますから。

７ｋｍ以内なら気づかれていなければ１００％当たります。」

なるほど…と、引き下がる龍宮さんに対して顔をまじめにしながら聞いてくる学園長。

「魔法を銃に組み込んでいると？それは魔法学園で学べるレベルではないのではないとおもうんじゃが？」

「はい、なので…これを使いました。」

そういいながら目を指差す俺。

目の中には魔方陣が浮かんでいる

それを見つけ驚いた表情をする各々。

自分の体に魔法を組み込むなど正気ではないと思ったのだろう。

だから、何かを言われる前に俺が言う

「この魔法は、私の母方の一族が受け継いできた秘法です。
これを使えばあらゆる魔法の術式を見取ることが出来ます。」
表情の変わるタカミチ&学園長
この瞳の危険度がわかったのだろう。
「生憎、これとは別の理由で母の一族は滅んでしまい、これが使えるのはこの世界で俺しかいないです。
発動条件なども一族しか使えませんし」

「ふむ。まぁ…良いじゃろう。
夜の見回りは遊撃として、あらゆる場所に向かってもらうことになるがいいかのう」
「遊撃ですか…。つまり自分の判断である程度は動いて良いのですよね？」

「そうじゃ。
指定した地域の先生又は生徒と協力して侵入者を撃退してほしい。」
「分かりました。では、そろそろ帰りますね。詳しい日程などはま

た後でお願いします。」

うむ。と学園長がうなずいたのを確認してタカミチさんや龍宮さんに挨拶をしてから帰る。

帰る途中で茶々丸に口の動きだけで呪いも見ることが出来ると、伝えると一礼してから去っていった。

たぶんエヴァンジェリンに伝えに向かったのだろう。

さて、帰るとしようか。
明日は新学期。
やっと、原作開始だ。

後片付けと、説明会。（後書き）

メデオルの武器説明。

本分の中では戦力の説明だけで分かりにくいところがあるとおもうので。

まずハンドガン。

ぶっちゃけ、ハンドガンに見せかけたナニカ。

カードリッチには転送の術式が組み込まれていて玉切れの心配がほとんどない。

使用弾丸はダイの大冒険でファーム？だかが使っていたような奴と同じ仕組みで薬きょうに握りながら魔法を唱えるとその中に魔法が組み込まれるという仕組み。

作り置きで、倉庫とした部屋にある弾を転送することが出来る。

まだ実弾は届いていないので魔法弾のみ。

障壁突破弾もある。もちろん威力は折り紙つき。

ほかにも少々ギミックがある。（トリガーガードの前の部分とか。

マシンガンはマジで殲滅用。

まだ覚えていないけど、魔法の射手異常の威力を込めた魔法を連射する予定。

膨大な魔力があるから時間が許す限り弾を作り続けることが出来る

スナイパーライフルは作中とおなじ。

２つの魔法により命中精度を極端に上げている。

なお、神鳴流やバグ（ナギ、ラカン）には叩き落されたりするが、普通は当たる。

障壁突破弾はスナイパーも使える。蓑虫は耐久性の問題で１のみ使用可能。

魔法を込めた弾は距離が遠すぎると威力が落ちてしまうので余り使わない。

その他疑問があれば答えますのでよろしくお願いします。

ガン＝カタを主人公が使うのは世界が丸いのと同じく真理です！

ここだけは例え殴られても変えることはありません。

たぶん

原作開始！。

「学園長先生！いったいどーゆーことなんですか？」

神楽坂アスナが登校中にしった事実を確認しようと学園長に詰め寄る。

原作道理にことが進んだのかアスナはジャージ、しかし、ネギは原作よりしっかりしていて、アスナに謝ったらしいし、性格的には良い方向に向かっている。

「まぁまぁ、アスナちゃんや。

…なるほど修行のために日本で学校の先生を……。

そりゃまた大変な課題をもらったのー。」

「は、はい。

よろしくお願いします。」

原作道理学園長が近衛このかに叩かれ、アスナに子供が先生と言うことで詰め寄られ、ネギに修行の重要性を説いてネギがそれを了解。

「うむ、分かった！

では、今日からさっそくやってもらおうかの。指導教員と副担任の先生を紹介しよう。

しずな君、メデオル君。」

「「はい。」」

２人で返事をしながら学園長室に入る。

はいったら、しずな先生の胸に頭を沈めているネギ。

うらやまｓ…うらやましい。

「分からないことがあったら、彼女かメデオル君に聞きなさい。」

「あ、はい…て！お兄ちゃん！？」

やっと俺に気づいたネギに呆れ顔で対応する。

「おいおい、半年会わなかっただけで幼馴染のことも忘れてしまったのかと思ったよ。

ネギ、久しぶりだな。」

あわあわと微笑ましい行動をしている。

俺がいるせいか、おかげかネギは原作より子供っぽいことがみられるようになったようだ。

「そうそう、もう一つ。

このか、アスナちゃんしばらくネギ君をお前達の部屋にとめてもらえんかの。

先にあった部屋にはちと先客が入ってしまってな。まだ住むところ決まってないんじゃよ。」

「…え。」「ゲ」　あ

ネギはさっきのことがあったから少し気まずそうに。アスナも同じく。

俺は俺の行動でネギがアスナのところに行く口実を作ってしまったことに。

アスナが詰め寄るが流されてしまい、結局は住むことになってしまった。

アスナはしずな先生から渡された新しい制服に着替えて２－Ａに向かう。

初対面であんなことがあったせいか機嫌が悪そうだ。タカミチが担任から外れたのが大きいと思うけどね。

「メデオル先生、うち、近衛といいます。よろしゅう。」

「あぁ、こちらこそよろしく。

近衛ってことは学園長のお孫さんかな？

こんな美人のお孫さんがいるとは学園長もうらやましいね。」

「ややわー。うち、そんな美人じゃありまへんよー。
でも、お爺ちゃんなん、いつもお見合いさせてくるんやわー。
私はいややっていってるんやけど…。」
「まぁ、学園長にとって、孫に変な虫が付かないように必死なんだろうさ。
お見合いは嫌だとしても、学園長はきらいにならないようにな。」
「失礼します！。行こう、このか！」

アスナが手をこのかのとって先に教室に行ってしまった。
少し起こっているネギに、しずな先生が軽くなだめ、クラス名簿を渡している。
「それじゃ、あとはよろしくお願いしますね、メデオル先生。」
「わかりました。…大丈夫だネギ何事も落ち着いてやればできるさ」
わたわたしているネギを落ち着けるためにやさしく言葉をかける。
「うん　そうだね。ガンバルよ！
あ、そうだ。お兄ちゃんは今までどこに行っていたの？ネカネおねえちゃんが心配していたけど。」

「あぁ。俺はアメリカに行っていたんだ、少し必要なものが在ってね。」

そっかーと、いいながら教室の中をのぞく。

３１にんの女子高生。ＰＣをやっている子から、肉まんを食べている子カメラをいじっている子など、個性に満ち溢れた中学生が、…ところどころ場違いな人もいるが教室内でわいわいとやっている。

ネギは若いエネルギー（？）におされて、また緊張し始めてしまっているようだ。

「失礼しまーす。」

ドアをあけて、入るネギ。落ちる黒板消し。障壁を張っていたため一瞬止まるが、俺が障壁を消し、目に粉が入る。そのせいでふらふらと前のロープに引っかかり、落ちてきたバケツをかぶり次に矢が当たる…ところでネギをとめてやる。

「はいはい。大丈夫か、ネギ。」

右手に矢を全部掴み、左手にネギを持ち、教壇まで連れて行く。

「今学期から教育実習生として、入ることになったネギと、メデオルだ。

３学期の間だけになるがよろしく頼む。

…それと、ネギいまだにふらふらしているから俺が進めるが。誰か

ハンカチか何か貸してくれ。」

「先生、ここは、私雪広(ワタクシ)あやかにお任せください。」

おぉ、流石いいんちょ。ショタには目が無いな。

「んじゃ、よろしく頼む。まずは、ネギが治るまで軽く自己紹介でもするとしようか。

俺の名前はメデオル・E・スプリングフィールド

年齢は１６歳、教員免許はアメリカで取ったから確り持っているからな、ネギも同じ。

一応大学では教授なんて呼ばれてたりしたな。

好きなものは甘いもの。餡蜜からチョコレートまで何でもござれだ。

嫌いなものは特に無し。

ほかに聞きたいことある奴いるかー？」

テキパキトすすめることで、２－Ａのペースから崩して、こっちに伸させる。騒がしいクラスは第一印象である程度緩和できるからな。

「ハイ！ここは、報道部のパパラッチこと朝倉和美が質問します！」

「ＯＫ、どんとこい」

彼女はーいない。

出身はーウェールズの山奥、イギリスだ。

このクラスで誰かきになる子はー龍宮と、茶々丸かな。美人だし。

きゃいきゃいと、質問ごとに騒ぎ出すがこれくらいなら許容範囲。

「おし、ネギが復活したみたいだから自己紹介な。ネギ」

「は、はい。ネギスプリングフィールドです。三学期の間まほ…、英語を教えることになりました。よろしくお願いしましゅ。ぁぅ。」

「か…。」

あ、まずい。すぐに耳をふさぎネギから離れる。

「かわいいいいーーーー。」

さすが女子中学生パワーあふれている。

ネギがもみくちゃになりながらも質問に答えている。

「おちつけー。ネギも大学卒業程度の学力と知識があるから大丈夫だが、お前達よりも年下だ。おてやわらかに。」

そこからは原作道理、アスナが教壇に持ち上げ、それをいいんちょがとめる。

喧嘩になるが、おれが止めて、終わらせる。
授業をはじめるが、緊張してぼろぼろ。
アスナといいんちょがまた喧嘩している間におわってしまった。
まぁ、おおむね原作道理に進むだろう。
次の時間は俺の事業。数学を担当することになり、２－Ａのほかに１－Ａと３－Ａも教えることになったが、問題なく進めることが出来た。
その後に歓迎会。
ネギが宮崎を助けアスナに魔法がばれたようで、タカミチに読心術をかけていたが。
悪意がないので、そのまま読ませているらしい。
そのまま歓迎パーティーは続き、食べ物がなくなった時点で終了。
クラスの人と話しながら後片付けを手伝い帰宅する。
いや、しようとした。
途中の通りで林の中から出てきた、茶々丸とロリ幼女。
「キサマ、今へんなことを考えなかったか？」
「考えてないよ、ロリ幼女。…あ。」

プルプル震える幼女と無反応の茶々丸。
エヴァンジェリンはゴスロリ服。茶々丸は征服のままだった。
茶々丸は食べることが出来ないし、エヴァはあの空気がだめなのだろう。

「ふーふー。…まぁ、いい。
大体察しは着いていると思うが、キサマを招待してやる、付いて来い。

拒否することはやめたほうがいいぞ。」

やっと、落ち着いてきエヴァンジェリンを――――――

「はいは。わかったよ、幼女――――「幼女言うな！」わかったよ、キティー」

また挑発。

エヴァンジェリンがギャーギャー騒ぐが、それほどキティーは恥ずかしいのか。

茶々丸に首根っこをつかまれながら、エヴァの家に向かう。

今夜は三日月だ、噛み付かれるれることもないだろう

林の中を茶々丸の後ろに付きゆっくりと歩いていく。
首根っこをつかまれている幼女が騒ぐせいで、折角の風景も台無し

だったと、後でメデオルはいっていた。

それにしても、茶々丸ってこんなんだったっけな？

原作開始！。（後書き）

基本原作道理に進みますから、会話などはメデオル主体のところしか書きません。

ＳＳの醍醐味は主人公と違う場面での話だと思いますので。

文の中の人との会話が苦手なせいで会話が少なくなってしまっていることも否めませんがね。

更新記録

タカミチを独身術→読心術（とんでもない呪いをかけるところでした。

その他詳しい表現を少し加筆。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0648x/

ネギま転生。俺はネギを否定《特別扱い》しない！

2011年10月9日04時09分発行